三四会玉川支部総会

平成22年10月30日(土)

世田谷区三軒茶屋、銀座アスター三軒茶屋賓館にて開催されました。14号台風の直撃にて会員出席予定者25名のところ6名欠席となり、結局19名参加の総会となりました。

総会では悪天候をおしておいで頂いた比企三四会長から連合三田会に三四会からイヴェントを開催したことをご報告され、北里柴三郎先生そっくりの御令孫北里一郎先生の講演が盛会であったこと、女性医師支援プロジェクトに言及され、この件については佐藤美奈子先生から菅沼副会長とともに三四会としての支援活動されていることをお話いただきました。また関連病院長会々長の松本純夫東京医療センター長より現況についてお話があり、小玉隆一先生(専3)の御発声で懇親会が始まりました。千葉から馳せ参じられた末松医学部長は台風のため交通渋滞にて遅れて来られましたが、いつものようにノートパソコン持参されパワーポイントにて3号館北棟のフロアプランなどの御説明があり、なかでも低侵襲検査部門の内視鏡に虎ノ門病院の先生を引き抜いた話は迫力がありました。そのほか咸臨丸プロジェクトでは勝海舟が船大工を乗せて修理しながら太平洋を横断したように、資金も人材も全て自分で調達する研究とのことで新しい考え方の研究で、信濃町あるいは医学部にとどまらず多方面を巻き込んだ業績になるとのことでした。そのほか我々の時代の所謂無給助手は現在皆無で大学院生も奨学金制度で授業料もなくなるとのことでした。新しいアイディアでしかも精力的に信濃町の改革、発展に尽力されていることは大変心強く印象付けられました。

その後各人の近況報告があり、寡たけなわのうち、最後に久布白兼和先生(30回)の締めの御言葉にて閉会となりました。

出席者

前列右から　田村武司(専4)、久布白兼和(30回)、小玉隆一(専3)、比企三四会長、末松医学部長、宮崎道夫(40回)、佐藤美奈子(65回)、荒田尚子(65相当)、

後列　厚東篤生(45回)、野本保夫(49回)、羽飼　眞(67回)、坂井真(39回)、有馬　亨(42回)、東條　毅(39回)、重松次郎昌幸(74回)、小平　進(42回)、松本純夫(52回)、杉田　稔(49回)、宮崎　祐(72相当)、杜　子威(40回)、加藤良一(59回)　敬称略

(文責　宮崎道夫)

江東区三四会

江東区においては、長年、諸先輩の先生方が三四会支部の設立を望んでいましたが思うにまかせず見送りになっていました。

今般、有志の先生6名で設立を企画し、大先輩の福井光寿先生に、この趣旨をお伝えした所、是非設立をと希望されましたので、有志6名が会合し、江東区に在住、在勤務医の先生方を調査した上で三四会支部の設立の趣意書を送付し、賛同をいただきました。

9月25日、ロイヤルパークホテル桂花苑にて会員24名中11名の参加にて、第1回江東区三四会を開催致しました。

小生、尾関の江東区三四会設立の経過報告後、福井光寿先生のご挨拶後乾杯発声に続いて、懇親会に入りました。会は和やかな、賑やかなうち、各自の自己紹介と近況を語ってもらい、その後、今後の活動方針を検討し、来年の再会を約してお開きとなりました。

今回は初めての会なので参加人数が何人になるか不安でしたので、ご来賓としての方々のご招待は見送らせて頂きました。

次回は是非ご招待をと考えております。

出席者は福井光寿(29)、尾関全彦(39)、樋口正俊(40)、土屋喜嗣(42)、土屋了介(49)、畠晃(51)、井太屋美晶(58)、張簡俊添(60)、笠井秀明(61)、桜岡浩一(61)、熊谷和浩(63)

(記　尾関全彦)

医学部英語会

3大学合同国際交流セミナーを開催！

医学部英語会代表　山本　一希(4年)

医師という職業には常に英語がついて回る、とはいわずと知れた医学部の常識である。医学部英語会(Medical English Speaking Society通称MESS)は、誰しもが求める英語力向上を目的とした慶應医学部の文化団体だ。

医学部英語会では、週1回メンバーが集まって即興のスピーチを行ったり、全員でディベートを行ったりして、日常的に英語を使う場を設けている。それに参加することにより、それぞれが英語力やコミュニケーション能力の強化を図ることができるのである。また、英語に加えて海外での医療に興味を持つメンバーが非常に多いため、それぞれがモチベーションを刺激しあうこともできる。意見交換の場として利用する者や、ともに勉強する仲間を見つける者もおり、医学生の交流の場としても重要な役割を果たしている。

今年はさらに多岐にわたる活動を行ってきた。慶應医学部のOBでハワイ大学教授の鈴木光明先生(41回)によるインターネット電話(Skype)を介した症例検討や、慶應医学部英語教員のティモシー・ライト教授のご協力による国際交流セミナーなどである。これは海外出身の様々なバックグラウンドを持つ先生方の講演を聴いてそれに関する討論を行い、国際人としての教養を身につけることを目指している。これらの活動を通し、英語力はもちろん、医学面、さらには人間力においても能力の向上を図ることができた。

我々は2010年の活動の集大成として、四谷祭で11月6日に、3大学合同国際交流セミナーを開催した。内容はArabi夫妻による「イラン総論」と「植物バイオインフォマティクス」の二本立てで、渡辺賢治会長やライト先生、医学部英語会に所属する学生の他にも、英語に興味がある慶應医学部生が20名以上も参加し、非常に盛況であった。さらに、このイベントでは国内の他の医学部(日本医科大学と東京慈恵会医科大学)の英語会を呼び、世界に視野を広げる機会を共有した。これは医学部英語会史上初の試みであり、国外に向きがちな医学生同士の交流を、国内の医学部同士でも行って、将来の医師人生に活かすことが目的だ。2大学から合計10名弱の参加者を集め、ともにディスカッションを行い、セミナー後には食事会を開いて交流することで、有意義な時間を過ごした。

今年いっぱいで私の代表としての責務は終わるが、来年以降も国内外での医学部英語会のさらなる活躍に期待している。

国際交流から考える国内交流

～次の飛躍に向けて～

医学部英語会渉外　堀田　陽介(3年)

海外に興味を持っている学生は多い。たくさんの先生方の協力があって、慶應医学部の学生は貴重な国際交流の機会を享受している。夏期外国派遣研修はその最たるものだ。低学年から国際志向を持つ学生も少なくなく、医学部英語会・日韓医学生交流会などの学生団体に求められる役割は非常に大きい。医療が国際社会という大きな枠組みで捉えられたとき、学生時代に多彩な環境・文化・価値観に触れることは、将来にわたってかけがえのない財産になると思う。

ただし、国際交流とは単に「海外の大学と交流すること」だけではなく、国内の他医学部とも積極的に交流する姿勢をも含むのではないだろうか。私たち医学生は、将来ほぼ同時期に日本の医療を担うことになる。医療を取り巻く環境がさらに複雑になり今後、医療現場・研究機関において大学の垣根を越えた連携がより一層重要になると思う。だからこそ、それぞれの校風に愛着を持ち始める医学部時代こそが、まさに国内交流を始める一大チャンスなのである。四谷祭において3大学医学部の英語会が集まることができたのも、各校の代表がこの点を強く認識し、足並みを揃えることができたからに他ならない。

また、医学部英語会ではもう1つの国内交流、OB会の設立も目指している。学生時代に国際交流を通じて多様性に触れた多くの卒業生たちが、どのような進路を辿っていったのか、経験を共有させていただけるならば、将来を模索する医学生にとって大きな起爆剤になるのではないだろうか。

2011年1月より93回生が幹部学年となる。慶應医学部が『世界に雄飛しうる人材』を求めるように、医学部英語会は『国際社会に対応できる人材を目指し、可能性を拓く』ことをVisionに据えている。今後、一段と飛躍するべく、国内外の両方を見据えて、国内医学部合同スピーチコンテストやSkypeを通じた国際会議など、限りない可能性を信じて、新たに挑戦していきたい。

医学部英語会で学ぶこと

医学部英語会会長
漢方医学センター　渡辺　賢治(63回)

医学部英語会(通称MESS)は医学部学生の熱心な活動により幅広い活動を展開している。

熱心な学生活動を支援してくださるのは、信濃町で教鞭をとられているライト先生やハワイ大学でも教えられている鈴木光明先生(41回)ら多彩な方々である。ライト先生は、ウェールズ出身であり東京大学で英語を教えていらっしゃるTaylor先生や、イランから東京医科歯科大学に留学しているArabi先生ご夫妻らを招いてくださり、学生にウェールズの文芸作品やイランの国についての話を聞く機会を与えてくださる。一見医学とは関係ないが、異文化と触れることは多彩な社会背景を有する患者さんに対して幅広く対応できる人間性を養うことに役立っている。

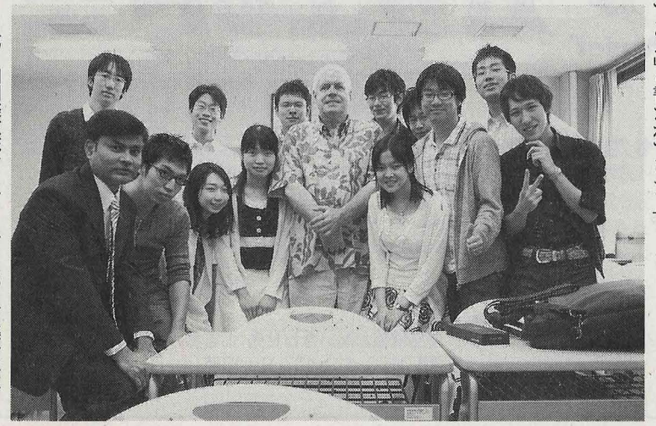
また、鈴木光明先生はスカイプを使って定期的に症例検討をしてくださる。ハワイ大学はProblem Based Learningで有名な大学であり、鈴木先生ご自身、慶應の医学教育に多大な貢献をいただいている。

学生だけでの活動のみならず、こうした多くの先生方から直接ご指導を受けることができるのも医学部英語会の特長である。

その名称から誤解されておられる方も多いと思うが、医学部英語会の活動目的は決して英語のスキルアップではない。英語という道具を用いたコミュニケーション能力のスキルアップである。個人的な経験で申し訳ないが、私が米国に留学する際に、1960年代に留学した叔父から手紙をもらった。そこには「真の国際人は英語の能力で測れるものではない。国際人であるかどうかを問われるのはヒューマニティーである」と書かれていた。

現在の医学部英語会の活動はまさにコミュニケーション能力を養いながらヒューマニティーを磨き上げる活動である。英語はあくまでも道具であり、医師としての素養を培う上で非常に貴重な場となっている。一人でも多くの学生がこうした機会を利用して欲しいと願っている。

Arabi夫妻を囲んだ懇親会メインテーブル



第1回国際交流セミナー(5月15日)集合写真